



川沿いに野草や樹木が茂ったり、花が植えられていたり、今も市民と共にある川であることが感じられる

水利・開拓の起点として

旧暦明治4年11月、北海道開拓使貫^{かん}属^{ぞく}（武士の身分をもち、北海道の防備と開拓に従事する者）の命を受けた仙台藩土片倉小十郎の家来、佐藤孝郷^{さとうたかさと}ら67名の先発隊が土地割渡を受けるために豊平川を渡り、東岸の土地で最初に渡ったのがこの望月寒川だった。

海拔60[㍎]の月寒丘陵から石狩平野を眺めると、左に望月寒川、右に月寒川があり「水利の便はよい。ここを開拓しよう」と衆議一決したのである。

アイヌ語で「モ」は「小さい」で、モ・チキサプ川は月寒川の支流という意味だろうが、「チキサプ」の語源は「アカダモの木片で火をおこしたところ」など諸説があり、はっきりしていない。

当て字は開拓期当初は最月寒だったが、間もなく望月寒に変わった。これから開拓を始める月寒川流域一帯にて足を踏み入れるにあたって、素晴らしい土地になるようお願いを込めて、「望」の字をあてたのだろうか。

入植した旧仙台藩士たちは、官軍との戦争に負けて武士としての家禄はなく、荒れ地を耕し、畑を作って生産を担うしかなかった。開墾にすべての「望み」を賭けていたのだ。

開拓使の指示で現在の国道12号の原型となった道を入植区間に造ることに

なった。旧千歳線と国道12号が交わるあたりから望月寒川を渡り、幾つかの小川を越える長さ2,000間(3,600[㍎])、幅20間(36[㍎])の道だ。

望月寒川の功罪

望月寒川は真駒内南部の丘陵^{しこつこ}を源として、支笏湖カルデラ噴火による軽石流堆積場台地を流下し、月寒公園池の縁、国道36号を越えて白石に入り、菊水を潤して月寒川と合流する。

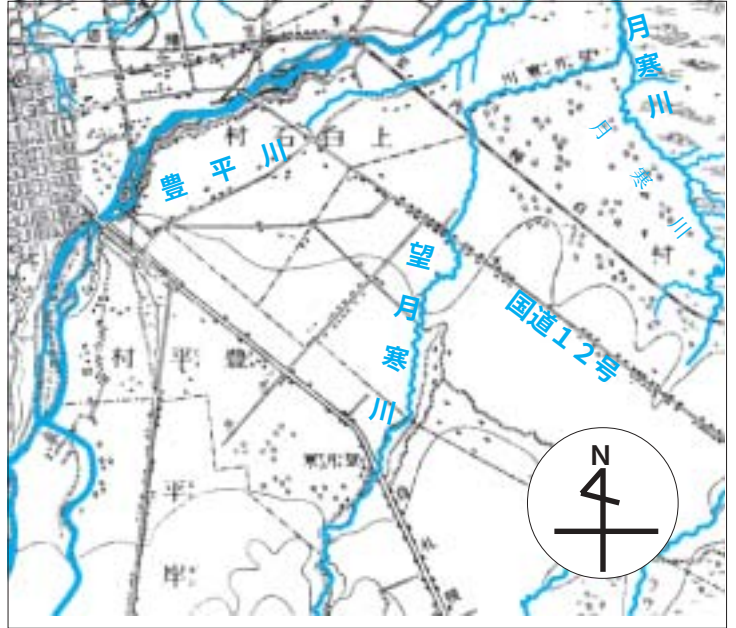
豊平川は明治4年から平成5年までの間に、40回も洪水^{はんらん}を起こしているが、望月寒川も同様に氾濫を繰り返したはずである。入植後最初の災害は、旧暦明治5年(1872)3月、雪解け水が低地に流入し、土地割渡^{わりわたし}を受けた左右1～7番地、18戸の浸水である。この状況は毎年繰り返されることになるので、本通の横丁の踏み跡程度に細い札幌本府通沿いに移り住んだ。そのためそこは横丁と呼ばれた。最後の水害は昭和39年(1964)9月9,10日で、この頃に農業をやめる人が出てきた。

望月寒川は、災害ばかりでなく限らない恵みも与えてくれた。

この川にはサケ、イトヨ（トゲウオ）、ウグイ、ドジョウ、ニジマス、アメマスなどが生息した。まだ牧畜を行っていない時期だから、食用肉は狩を行うしかなく、川魚は貴重なたんば

豊かな自然の恵みを与えた 白石の母なる川、望月寒川





古い地図を見ると、望月寒川が白石の中央を流れ、重要な存在であったことがわかる（明治29年の5万分の1地形図）

く源であった。

明治7年、開拓使から村民に米の種粃^{たねもみ}が配られると、川水を使って試作を繰り返した。望月寒川沿いの白生公園には開田碑^{ひふん}があり、碑文によると明治14年（白石村誌では16年）に稲作に成功し粃^{かいでんひ}79俵を得たとある。望月寒川が与えた大なる恵みである。こうして、北郷、菊水、川下一帯に水田開発が進み、穀倉地として札幌市民を助けたのである。

札幌市に合併する前の白石村勢一覧（現厚別区を含

む）には、稲作面積1,015町3反2畝（1,007[㌧]）、収穫高は19,074石（3,440^{キログラム}）と記されている。

都市化の波の中で変貌

昭和40年までの地図を見ると望月寒川は蛇行した自然河川のままだ。昭和41年（1966）から8年計画で土地区画整理事業が進められ、総額9億7千万円で道路、公園、河川の改修が行われた結果、川はかなり直線化された。

望月寒川と月寒川の合流点に開発局が月寒排水機場を造り、石狩川の逆流を防ぐ工事も行われ、下流域の洪水対策も進んだ。月寒射撃場から道道西野白石線までは砂防河川として、兩岸がコンクリートで固められ、味気ないが安全な河川になった。

川と直接かかわる生活がなくなり、川の姿も単なる排水路化してなじみにくくはなったが、開村以来白石に恵みを与えてくれた母なる川「も・ちきさっぱ川」の名は失いたくない。

（中濱康光）

昭和29年の望月寒川。下は国道12号の白石中央4、5丁目付近